

上矢敲氷伝 — 天明元年 — 四年 —

清水 茂夫

一、俳諧活動の実態

天明元年（一七八一）五十歳

安永十年四月二日に天明元年と改元された。前年九月廿八日に俳諧行脚に出発した敲氷が、帰庵したのは、天明元年四月十四日で、「坐右日記」はこの日から記されている。

（四月十四日）「去年の神無月、時雨ふりおけるならばの編戸とさしもならで武江に赴きしが、霞立わたる春の日もうつりやすく、麦の秋風に驚かされて、今はとて故郷に帰る。叢菊の荒ぬるも若葉になり、孤松の撫さるも緑色そひていとをかしければ、竹の窓蜘蛛の毬打ち払ひつゝ吟ず。我留守に巢をくうたるかかんど鳥 敲氷」

俳諧に執心する敲氷は感興の導くまゝに行脚を重ね、半歳を経て帰庵したのであるから、その感慨は深かったであろう。荒れた庵を片付ながら聞いた閑古鳥の声は、その感慨を一入深く心底に印したに違いない。帰庵を聞いて駆けつけた門弟の曲肘が「夏瘦も日黒みもせず桧木笠」と吟じて、師の無事を喜ぶと、敲氷も「久しく聞かぬさびしきの唄」と応えて久方ぶりの対面を歓喜した。

こうして平橋庵は次々と来訪する門弟で賑うのであるが、それらの日々の記載の中から主要なものを掲げること

したい。ただ敲水の吟じた発句と門弟の佳吟とは、その文芸性を考察するために重要な資料であるから、なるべく採り上げたい。

(十八日) 春夕・曲肘らと歌仙興行。連衆五。(廿二日) 潤路来訪。「若がへる若葉の月や椎と樞 潤路、ほととぎすほど 待会うた友 敲氷、一声の跡は銜やかんこ鳥 氷」(廿三日) 如雪庵尺五が谷村から古府への帰途立ち寄る。潤路は敲氷の宗匠となる以前からの俳友、尺五は同じ柳居門で浮亀庵卷阿の高弟、支援しつつ支援されつつ共に俳諧に生きる俳人である。(廿四日) 曲肘・亭午らと歌仙興行。(廿五日) 亭午・茂林・為霜・子揚らと平橋庵で歌仙興行。(廿六日) 五民・楓楚・錦江来訪。「手を引て渡る橋あり杜若 五民、荒れた古巢に遊ぶ翡翠 敲氷」訪れた五民が、平橋庵の囑目吟として、手を引いてもらわなければならないような危なげな橋があるが、その流れは杜若が美しく咲いていることだ、と平橋庵をほめると共に、これから俳諧の指導をお願いしますと発句を吟ずる。敲氷はそれに答えて、こんな荒屋ですが、あの可憐な翡翠が遊びに来ますよ、と付句する。庵を荒屋と言って謙遜すると共に五民の来訪を飛来して遊ぶ翡翠に喩えている。(廿七日) 「待ちくゞて鳥聞えけり杜宇 杜采、鉢植に花の重たき牡丹哉 翠袖、夕暮に声かれもせず 行々子 同」杜采は門瑟の弟子の古洗の妻である。安永八年の年頭から敲氷やその長男花青らの指導を受けた杜采と翠袖は、敲氷門の女流俳人の先駆者である。(廿八日) 訪れた由古・曲肘と歌仙一折興行した後、各新樹を題にして吟じた。「鶯の黙って遊ぶ若葉哉 氷」

(五月五日) 露江・茂林・亭午・花青らと歌仙興行。後探題。「軒伝ふ風も五日のあやめ哉 露江、柴売のこころ置なる蓬 哉 亭午、菖蒲ひく跡や濁さぬ池の水 茂林、木隠れの里あらはるゝ幟哉 花青、香を留て能衰着たり菖蒲壳 氷」(廿一日) 「梅咲や水だけ吼る塚の内 兀貫、飛石にはかなき夢や蝸牛 同」。この二句を携えて来訪した兀貫は、久しぶりで投宿した。「先たのむ一木咲きけり合歡の花」と発句し、敲氷は「はしらに懸る梅雨晴の蓑」と付句した。師弟の情が句の背後に漂っている。(廿三日) 書音。「拜殿の昼寝は誰ぞふじの花 秀外(三句略) 又蛩が浮いて涼しや木下闇 引蝶」と文通

で句を送る者もあれば、夜涼のように来訪して俳話に時の移るの知らない者も多い。(廿六日) 山風亭会では兼題夕顔で、「夕顔やあるじは時にあはぬ人 氷」当座吟で、「昼も門叩く栖や合飲の花 氷」と吟じている。夕顔の句は夕方開き翌朝までにしぼむという性質からであろうか、あるいは源氏物語に見える「口惜しの花の契りや」と言った源氏のことなども含めて発想されているのであろうか。また、敲氷自らの分際を時にあはぬ人と吟じたのであろうか。俳諧に執心し、家業をも捨てた自分を見つめているようにも思われる。(晦日) 守黒忌。「享保のむかし眠柳居士みづから筆染玉ひし句帳一冊侍りしを、うまごなりける至静子深くひめ置かれしが、こたびやつがれに贈らる。是を故郷のにしきとなして、平橋庵に帰り守黒忌の影前にしたしき友がき招きつどへて、しかじかの事を告侍る。」と前書して歌仙を興行した。「仮名真名の俤ゆかし夏柳 敲氷、未汲む水に田うた流るる 花青、人知らず此の一ト郷の富貴にて路杏、普請の音はうるさくもなし 茂林、暮れかかる甚を桂男のさし覗き 五民(下略)」。

(閏五月朔日) 霜飛主の東武に赴くを送って「旅笠の軒にも匂へあやめ草 氷」、(五日) 北山何がし禅院に遊び、「目ざましや庫裏は麦打つ棒の音 氷」、(六日) 飯田八秋亭で歌仙興行の後、探題して「住よしの松風通ふ青田かな 氷」。(十四日) おのく探題せし時、「夏草やことしも地突はじまらず 氷」「柄杓には施主の名もあり苔清水 氷」(十八日) 善光寺月影塚に一日千句興行の折から手向の吟、「吟声をたすけよ塚の松に蟬 氷」(廿八日) 養老園を訪ひ侍るに数根の桃夏木立のさま興あれば「菓子盆の早桃や春の物語 氷」

(六月朔日) 井柯の武江に赴くを送って「氷室から出たるか旅の笠白し 氷」一宮神社奉納を乞われて、「一富士や氏子涼しき夢の告」、(四日) 永秋法師の示寂を聞き待て「紫の雲となりけり五月晴 氷」、翠溪両子の父の身まかりぬと聞きて「筆とつて向へばむせぶ蚊遺哉」(十七日) 立秋「夏野とや秋とやいはん草の露 氷」(廿六日) 一向宗の寺院で百韻興行「はいかいの同行寄って涼み哉 氷」(晦日) 今井の山縣氏の許に遊び一句を望まれて「涼しさや秋を隣の一

構 氷

(七月二日) 善光寺より府下へまかりけるに「夢山や花と見る間に秋の雲 氷」(五日) 并柯主東武のせうそこ携て来訪。「守倦た水室を出るや心太 抱山」「街道を黙つて通る暑さ哉 秋瓜」「さかづきと金魚の鉢や罎 同」(七日)「箧壳の夫婦睦じ星祭 氷」(十四日) 盆会「魂棚や世はただ仮の細工もの 氷」武陽鴻巣より書音に「さし杉の芽のほぐれけり五月雨 鴻巣嵐二」「秋立つやきのふに替る雲ころ 惟山」尾陽書音「夏草や市出の駒の古ぼこり 雄交」画賛のよし「蚊屋もりて紙燭さす夜や時鳥 也有」おのく題をとりにて「稻妻や杉に隠るる三輪の山 氷」(十五日) 夜笈形の火見に赴いて向岡舎で歌仙興行、後燈籠と題して「月落て鴉啼けり高燈籠 氷」書信「秋立つや江湖の僧の身繕ひ 孤石」(十六日) 隣から秋を告げたる一葉哉 杜栄「蝸や釣の翁の戻る頃 翠袖」「馬宿の夜奇麗なり虫の声 氷」(探題)(廿日) 八秋亭にて探題「托鉢に其日暮しや木樞垣 氷」(廿七日) 潤路らと歌仙興行「三夏の田に穂波たつ巳待哉 潤路、琵琶弾く鳥のわたる夕月 氷(下略)」秋雨と題して「鹿の首の濡色聞かん夜の雨 氷」発句の巳待は己巳の日に行ふ弁財天の祭で、己巳の日の己の刻に弁財天を祈ると弁財天が姿を現し、拝したものは幸運を得るとされていた。弁財天の弾じている琵琶が付句を導いている。農村では穀物の神として信仰されていた。

(八月朔日)「八朔や門あらたまる酒はやし 氷」(八日) 山村三十番神奉納「晦日迄月夜ぞ神の懸鏡 氷」(十四日) 百童方に招かれて義太夫節を聞く。席上即興に「渡り来る声や難波の芦の雁 氷」(十五日) 秋は月、月はこよひにしくものなしと尼も入道も日課の念珠手まさぐりつつ打ち向ひて、日頃の宵まどひは忘れにたり。大路の往来には浄瑠璃小唄口ずさみて昼よりもかまびすしく、楼船浮べては美酒千斛に妓女をのせて波のまにまにうかれただよ。旅にさすらへばすすりに帰る情をおこし、家に在りては却て遠遊を羨む。詩歌に会する人を見れば深くいにしへを覗じて今をわすれ、すゑの世を忍びて苦吟やむ隙なし。月の光はとこしなへに悠々として静かなれども、眺むる人の心あはた

だしきぞ、村雲もたちあへぬこちなるかは。「名月や傾かせじと風の音 氷」(十七日) 廿年来の深交ある千竜が老を感じて故郷に帰ると別れを告げられ「月は廿とせのむかしも今も同じ倂に似たれど、頭の霜はいづれの鐘の音にか置きけんとあやしまるるもことほりぞかし。盃を啣て再会を期し袂をひかへて一句をかいやる。故郷は野も山も嘸からにしき 氷」(十八日)「麦林忌 此の道は限なし月に花すゝき 氷」(廿日) 城南に吟行して廿三日帰庵する。河東の一鏡舎・乙黒の蔵六亭で歌仙興行。「夜風の吹倦く頃や鹿の声 氷、朝霧や汀の松に音もなし 氷、翌日遣ふ斧研立てて夜寒哉 氷」(廿二日) 忘川亭のあるじの物故せし由を告げられて、急ぎ亭に赴き終夜妻子の愁歎を慰める。袂をうるほして靈前に一句を吟じた。(廿九日) 眉長ぬしに不落園の別号を与え、歌仙興行を催す。「不落園記」を書く。

(九月十三日) 長男山鶏の妻翠袖は女性俳人としても一家の主婦としても敲氷を支える存在であったが、十二日に没した。敲氷は「哀傷吟」を綴った。

世の中のおくれ先だつならひは草葉にむすぶもとの露末のしづくよりもはかなきためしと誰も誰も知り侍れど、愁に臨みては今更のやうにおもひ乱る。嫩なりける翠袖、病にふしぬる日数いくほどなくて、九月十二日常なきあらしに誘れぬ。いつくしみ浅からざりしときなきものは、乳ぶさの弁へしらでざり気なき顔したる見るにしのびがたく、すぎ間の風もいたはりし身をおどろくしき苔の下に埋みけるよとかなしみ餘て空をあふげば、こよひの月さやけきも涙さへきりておぼろげなりけり。こしかたおもひ出て、夜たけなはなるほどに峰の松風は我が身ひとつに哀催すかと覚えらるるぞかし。後の世をはるかに照らせ後の月

(十四日) 丹波国亀山の自転法師が東洛行脚して草庵を訪れた。友なき者の菩提のために誦経を乞い、翠袖の衣を贈った。十七日自転法師は去るに臨んで「諷誦文の済て漸寒覚えけり」の一句を残した。(廿三日) 道輪居士(細野氏)を悼んでは「行秋や雨にたなびく雲の旗 氷」と吟じ、廿五日には「恵光(翠袖)が到岸忌なれば墓に詣づ。きのふ

迄青かりし草葉も忽露霜に染みて色香こと也。ゆくものは日々とうとしといへるおもひ合せて 行秋やひと日く山遠し」と記している。

(十月三日)「槿の葉に秋風尽て時雨哉 氷」(五日)「達磨忌や文字に記さぬ料理立 氷」(六日)「結構な紅葉踏けりみそさゝい 氷」(十一日)門瑟の先輩弟子として、敲氷に惜しみなく助力した古洗が九日に長逝した。三日の法筵に次のことばを申し贈った。「葉月末より初冬まで、いくばく日ならぬにはかなき事の打続きて、古洗も終の烟とはなりぬ、世にいまそかりしほどなれもてあそびし鉢の草木の霜にしばめる風情を見れば、あるじをしたひけるにやとおしはかれて、袂をうるほしつつかいやり侍る。帰り花かへらぬ人に手向哉 氷」(十二日)「凧や吹きたきまゝの欄原 氷」「城跡にかぞへも尽ず霜柱 氷」
「盆のまゝ見ぬ人に逢ふ十夜哉 氷」(廿日)下今井の諸氏に庄の木稻荷社奉納の句を望まれて「たのもしき名や稻積の里神楽 氷」(廿五日)青柳諸好士百番句合角力と号して判を乞侍ける跋「或人語て曰く世に角力あれど行司なしと、かたはらの人なじつていはく、行司あれども相撲なしと。かの人腹よからず。其故いかにといふ。答て曰く行司角力の名を異にする時は、争ていかる心あり、是をひとつに思へるならんには、共に手を打ち興ずべし。其興ずること君子の遊びともいふべけれど也。「角力とりの中よく咄す炬燵哉 氷」上の句合角力という呼称は管見に入った最初のものであるが、平橋庵でも既に月次句合が催されていることを背景としている。(廿九日)書音、「おいくと跡から馬士や初しぐれ 秋瓜」「あかくと蕎麦の畑照る野分哉 同」「うら枯や夕日をはかる水車 秀外」「枯竹の摺れ合ふ音の寒さな 井柯」「水鳥や己と波を立てて行 夜涼」

(十一月二日)「笈摺の背中をあぶる巨燵哉 氷」(三日)寸虫子冬至梅の一句を吟じて草庵を訪ねるに「訪ふ客の笠に一陽動きけり 氷」。(六日)春沢和尚より画賛二幅需に応じて、野ざらしのかた「秋風や草もきのふの草ならず 氷」大黒のたはらさし上げたるかたに「見えたりと高く指さす恵方哉 氷」(十三日)梅童隠士ことし弥生四日蓮の宿に

赴かると聞てをしむにたえず。つく／＼おもふ事侍り。かの先人梅馬居士花の空といふめる一句を残されしが、今又此の隠士此の時に終をとらるるは、先の居士と浄土の花見を約したるか、居士はた飄然と化してかかる隠士と成たるか。只おぼろ／＼と花にくもれる空をなつかしみて追悼の口号をかいやるものならし。「来迎の雲や昨日の桃の色水」。梅馬は渡辺武右衛門と言ひ、藤井村（現勝沼町）の名主で、抱山宇門瑟に俳諧を学んだ。宝暦四年に没し、追善集「富士井の水」が子梅童によつて刊行された。辞世の句は「見定めて戻らぬ旅を花の空」である。梅馬の遺志を継いだ梅童は、宝暦十二年十月十二日に柏尾山大善寺の境内に芭蕉の塚を築き句碑を建て「俳諧甲斐塚集」を刊行した。そして梅童も天明元年三月四日不帰の客となつたのである。（十六日）西山下に吟行して臘月九日庵に帰つた。

（十二月十七日）府下へまかりけるに山の雪いとをかしければ「山畑のぬし誰々ぞ雪の朝水」（十九日）五遊法師七回忌「雪分けて手折る櫛やもとの色水」（廿日）十八日より七覚山に遊び今日帰る。（廿二日）文通、「目に障る物なき海や雪の朝乱竿」「繩手行按摩の笛か小夜千鳥米我」「門叩く人に逃行水鶏かな伝宿」（廿五日）年の用意に世の中うかれ立て訪ふ人稀なる草の戸を花郎ぬしに叩かれて「饗応に餘所の餅搗聞せけり水」。一宿して首尾吟興行。

以上で天明元年の目ぼしい俳諧活動を列挙したが、今までの坐右日記に毎月確実に記録されていた月次会はどうなつていたろうかという疑問がわく。これに対しては天明二年以降の日記と並べ考えて、月次会や句合などは省略されていると見ることができよう。幸いに「辛丑六月分句合」の草稿が残されている。催主は守拙齋で、参加した人名は、仙斧・亭午・敲柳・秀外・仙桂・溪十・海扇・枝流・曲肘・茂林・千竜・雪姑・池揚・平坡・春宵・可調・春夕・井柯・夜涼・春隣・秀山・松岨・一牙・全芽・桃雨・鷺文・三花・乙苑・古川・三家・山楽・松喜・丁和・斗十・十花・古椿・孤筵・巴東・五原・平坡・紫暁の四十二名で、皆平橋庵門下と見てよい。辛丑は天明元年で、六月分句合とあるところから殆ど各月に催されていたと見てよい。

「坐右日記」に発句七十七句所収。「続やどり木」発句一入集。

「桃の酔」追悼句一入集。

天明二年（一七八二）五十歳

天明二年の坐右日記は伝存していないが、表紙に「天明二年壬寅歳、袖中日記、平橋庵」と記された冊子があり、これによつて正月・二月・八月・九月の他出している俳諧活動を知ることができる。

（正月廿日）飯田八秋亭夜坐、おの／＼蒲公英「蒲公英や高ぶりもせず卑下もせず 風徑」「たんぼ、や宿引の袖ふくらかし夜涼」「蒲公英や野守が家の右ひだり 朝鴉」「たんぼ、の散りても塵はなかりけり 井柯」「蒲公英や此細道も捨られず 女花貞」「たんぼ、や葉ただくさに取みだし 敲氷」敲氷は八秋亭でしば／＼宿泊し歌仙興行をしている。飯田代官所に勤務する井柯の家であり、その関係の好士の集まりであつたと思われる。（廿一日）八秋亭に宿り春眠暁を覚えず隣家の唐臼に驚かされふすま取り収めつゝ吟ず。「臘夜と見て寝たりしがけさの雪 氷」（廿二日）加茂梅花齋主人の七十賀筵に歌仙興行の後に、「麦踏に罽預けて雲雀哉 潤路」「舞雲雀雨ふりこぼしく 曲肘」「首途の日和受合ふ雲雀哉 五民」「雪残る野にも雲雀の初音哉 女楓楚」「仰向ば足元からもひばりかな 亭午」その他仙斧・三花・茂林・春湖・溪十・子英・春夕・花青・曙白の吟があつて、「朝日より先へ出て居る日ばり哉 敲氷」で終わっている。

（二月朔日）田中青雀園において歌仙興行の後、題彼岸・初ざくらにて「花は咲き頭巾は潤むひがん哉 曲肘」「鍛鍛治の店も賑ふ彼岸哉 亭午」「娘連れて足元軽きひがん哉 茂林」「孫彦を杖にして行ひがん哉 春湖」「庵にも女客あるひがんかな 雪筍」「老の手に茶釜の光る彼岸かな 五民」「添乳して海人も昼寝のひがん哉 眉長」「渡し場に老の込合ふ彼岸哉 女露敬」「花嬢も誘はれて出るひがん哉 清子」「草表を見に老の出るひがん哉 三花」「祈出す朝観音や初桜 氷」各二句ずつの吟であるが、

一句ずつに省略した。(六日) 落合村の端午亭で歌仙興行し、後座に題苗代・接木で発句。「苗代や蛙はうたの種をまく曙白」「我心枝にうつして継木哉 同」「なはしろや爺のさし図の水加減 曲肘」「村中へ庵主の殖す接木哉 同」「なはしろや溝さへ水の新しき 亭午」「制札は見なく盗む接木哉 同」「苗代に鴉見て居る主かな 万里」「指折て孫に聞せる継木哉 三花」「二眼りして芽の覚る継木哉 三花」「苗代や寺領は水も寺領から 花青」「雇れて細工の外の継木哉 同」続いて溪十・五民・女楓楚・藤壽・竹家の発句で、おわりは「苗代や誠から出る水の末 水」「孫彦に花を好けとて接木哉 同」敲水の発句で結んでいる。その夜端午亭に宿った敲水は、藤壽・竹家と次の句を吟じた。「翌日は花見せんと降る夜の雨 水」「かほり床しき茶に春の水 藤壽」(廿六日) 浄源居士の去年の春継き置いた一本の木が花を開いた。少年五郎吉が手折つて持参し、その由を敲水に告げた。敲水は「手すさみの跡のはかなきをおもえば花も物いひ顔にて打ちしめりぬ。とりあへず筒にさしはさみ、つくぐながめやるとて、能き事を家に残して継木哉 敲水」と吟じて居士の心を偲び続けた。

(六月廿日) 草稿「富士詣百韻」は、花青・風随・井柯の三人が富士登山した折の百韻を中心に富士登山の過程によつて纏めたもので、冒頭は井柯の登山の発句で、「甲斐が根に五とせ住居して富士詣の事年々おもひ立ぬれど、公務にいとまなくただ止みぬ。ひと日門すずみして高根の晴風げに三国にたぐふべくもあらじと禪定頻に催し、雅友風随ぬしに杖をひきたまはんやと耳に口して、しかじかの事人しらず告れば、風に随ふ名なりとて打黙きつつ旅笠に印して身かろき首途をともに打わらひぬ。いざや此姿を師に見せんと壬寅水無月廿日平橋庵の扉を叩く。」千垢籬のはじめに橋の下涼し 井柯」軽快な書き振りの文章で、俳人井柯にふさわしい。師の敲水の俳文も極めて優れているが、千垢籬は川垢籬と書くべき所である。花青が加わり、三人が富士山頂に立ったのは二十二日であった。花青は次のように前書と表八句を掲げている。「井風両子の杖に縋りて水無月末の二日富士の高根によちのぼる。案内にぐしたる剛力名だたる所指さし、古歌引いてやさしくも物語るに、ふと一句をかい付け侍る。「雪踏で見下す田子の青田哉 花青、

匂ふ旭の夏さむき朝 風随、くはらりと別荘の戸を明けさせて 井柯、遠く知られる出来分限也 青、数々の牛を気俣に放し飼随、御慈悲深いと殿の取沙汰 柯、新米を月へ備へて腹つつみ 青、はたりくと屋根へ落栗 随。「また川口湖に臨んでは「富士を抱く産屋が崎の浪涼し 随、すゞしさや湖水に濡るる富士の裾 柯、能き業とすまし顔なる鶺鴒哉 青。」と吟じた。

(七月廿五日) 四川樓にて歌仙興行。連衆は孤石・杜栄・花青・春夕・濶路の五吟。探題に、「辻売に夕日を奪ふ西瓜かな 氷」がある。

(八月十七日) 四川樓にて「初雁や琴の声きく峰の松 杜栄」を発句として六吟歌仙興行。連衆は平橋・春夕・溪十・耳長・花寿ら六人。「鴨や柚子の匂ひはすかぬ顔 平橋」の吟がある。(廿日) 飯田の相川亭に宿り琴曲を聞く。

(廿一日) 河東の一鏡舎に宿り夜話。(廿二日) 乙黒の蔵六亭で歌仙興行。連衆は由和・竹雫・左城・霜飛・米義・春河・蔵六の八吟。後の発句は「留守の身を崩さぬ妻の砧哉 氷」「雨の日の路次へも馴るる水鶏哉 蔵六」など。(廿三日) 今福の常河亭において歌仙興行。「秋雨や月見て後の肘枕 氷」を発句とし、「あたため酒に飽きていも粥 蔵六」の脇で左城・米義・綾梭の五吟。探題に「うろくと膳に付けり角力取 氷」。(廿四日) 乙黒の由和亭で歌仙興行。綾梭・蔵六・由和・霜飛・米義・真阿・左城の八吟。探題で「雨乞の五十串も流せ落し水 氷、家作りを好み通して夜寒哉 氷」(廿五日) 成嶋の枯木庵であるじの談話に「昼の戸をひそくとたく水鶏哉 烏雪」

(九月二日) 一宮の不落園において歌仙興行。来許・仙丘・野石・眉長・霜女の六吟。余興として「船曳のぬれしくと草の露 氷」がある。(三日) なお雨降る中を連岡子の許に遊ぶ。「笠借て茸狩せばや庭の山 氷」「興添るにも足らぬ紅葉 連岡」に続けて歌仙興行。古園・野石・亭午・一洞・吟水・眉長・連岡・仙丘などの九吟。探題わたり鳥で「逢坂はいつ越えたるぞわたり鳥 氷」の吟がある。(四日)「言書ありて、寂しみのまだ聞足らず鹿の声 眉

長、膝くつろげて紅葉たく宿 水」と眉長亭での発句と脇句のみが「袖中日記」に見える。(九日) 四竹楼で、平橋・花青・杜栄の三吟歌仙と更に孤石・春夕を加えての五吟歌仙が興行された。四川楼興行では常に平橋と記されている。(十二日) 表に「天明二壬寅菊月十二日平橋庵定会」と記された草稿によれば、百韻が興行され、連衆は濶路・敲氷・市言・花青・春湖・勇起・露朝・曙白・曲肘・亭午・茂林・三花・孤石・春夕・路杏・五民で、十六吟百韻であった。(廿日) 塩山の麓の鯉尺の許に遊び歌仙を興行。発句は「冬待たでもてなされけり初時雨 水」、脇は「淋しさまさる袖垣の薦 鯉尺」で、鯉尺・笑巴・鬼明・敲氷の四吟であった。(廿一日) 鬼明亭で「織り習へ秋のにしき切れ鑑」と吟じ、翌廿二日は鬼明の案内で牛輿の阿水亭に赴く途中、珀賀亭と五風亭に立ち寄った。珀賀の形よき盆石を得たのを見た敲氷は、南山の寿ということを思い合わせて、「明暮に倦ぬ山ありきくの宿 水」と吟じ、珀賀も「稲むしろ設けて待けり月の客」と吟じた。五風亭では敲氷が「うらやまし爰は居ながら紅葉狩」と折からの紅葉の佳景をたたえると、五風も「谷川を隔てて待し鹿の声」と鹿の声の聞えるのに託して敲氷の訪問を待ち得た喜びを詠ずるのであった。阿水亭に宿った敲氷は、「幾夜でも倦ぬ鹿の音滝の音」と吟じ、阿水が「紅葉を焚て待受る月」と付句して歌仙が興行された。敲氷の発句「長き夜やしはぶく声は尉と姥」「水鳥や流るゝ紅葉追ふて行」(廿三日) 菱山の武井桂翁隠士を訪ては「桂翁隠士はたゞ盆中の物をたしなみて世の中の是非にあづからず。明暮庭前の山に對してこゝろ悠悠たり。行秋や紅葉の塵は塵ならず 水」と吟ずると、翁も「稀人に見せばや茶の残り咲」と応じている。夜は塩後の亀言亭で俳諧興行をした。

(十月十二日) 平橋庵において芭蕉翁追福五十韻興行。「ばせを忌や床に白菊白双紙 平橋」「茶は一碗に佗て口切花青」「迎にも牛がよかると言遣りて 百朶」に続いて、此竹・茂林・三花・曙白・杜栄・春湖・濶路・米我・亭午・春夕・路舌・孤石・眉長・勇記など十七吟であった。

(十二月七日) は四竹樓において、長瓜・磯石・平橋・杜栄・春夕の半歌仙が興行された。
袖中日記・草稿類に見える天和二年の敲水の発句数三十六句。「いとまごい」(門瑟編)に一句入集。

天明三年(一七八三)

(正月元旦)「鶯を聞かずば出でじ年の礼 水」「若水や朽葉に埋む樋の音 水」(草稿四句の二)(二日)春興十四句の中三句
「白壁は淀か伏見かおぼろ月 水」「若草や風土記にも名の高き里 水」「春風に門は柝の落葉哉 水」(四日)「何所もがもと朝音
聞きぬ春の水 水」(六日)越後より書音。「夜嵐や枝よりこぼる雪の音 秀外(三句略)」(七日)「姐板に松風通ふ齋哉 水」
(十日)音書「鶯や歩行を影の案じ僻 抱山字」「滝壺に落ちて渦まく椿哉 孤石」(十一日)京師から書音「何となく淋し並び
が岡の水 兀貫(二句略)」(十二日)「二本で事足る庵の柳哉 水」(十六日)「淡雪や盛上げて置く池の上 水」(十七日)「鞠
垣の四もとの外や梅の花 抱山字」(十九日)「門口の柝に残る寒さかな 水」(廿一日)「尋ね来て流れ汲ばや雪解氷 鬼遊、梅
よりも先芳しき客 水」(廿四日)うかい山会にて、「鐘がすむ暮や奈良には何百寺 水」、「苗代や爺はかかしの立婆 水」今
夜青羊・蔵六投宿して探題、花一つ二つに過ぎぬ椿哉 水」(廿八日)春雨の時得て遊ぶ蛙哉 井尻林風、氷解ても浅き池水
水。

(二月朔日)遁れても薫りは高し梅の庵 鷺石、けふもえ出る客の言の葉 水」(二日)「あらそうて芦の角ぐむ沢辺哉 桂園
(三日)来てみれば猶根の太き柳哉 和長、訪ふ人稀に橋の雪解 水」(六日)長田梅文の雪百句独吟の加点を乞われて
「雪より出て雪より寒き心地ぞする成べし」と前書して「朱硯に目を休めけり雪の空 水」。(七日)半峰亭で梅花仏
法筵、「梅に月幾世か照すかぐみ塚 水」半峰亭は母必と号し、四日市場(現石和町)に住していた。梅花仏は惟然で
芭蕉の高弟、母必は父加島鷗歩が芭蕉から「十八楼ノ記」を与えられた、その十八楼主と一時なった俳人である。惟

然と母必との詳細な関係は明白にし得ないが、家を出て甲斐の田舎に婿入りした母必の生活には惟然を思慕する雰囲気が濃厚である。敲氷が宗匠として歳旦帳を刊行して以来、母必を俳諧の先輩として遇し、母必も支援を惜しまなかつた。(十四日) 鶯の笠と連立首途哉 氷(如雪庵主に) (十五日) 世の中を暖にして涅槃哉 氷(廿四日) うかひ山会。まだ見ずといふ人にくし初桜 氷。(廿五日) 笛川舎で聖廟法衆に文房を探題として、「怠らず花の雪積む机哉 氷」(廿六日) 書音、畑中に雪しさらせて梅の花 柳丸。

(三月朔日) 武江書音、「よしとのみ世に見られしやあしの角 抱山宇」(三日) けふは出て顔見られけり雛造り 氷(五日) 花笠の懸所なし萱の軒 氷(七日) 寒月や綿着て戻る白拍子 京蝶夢、ふくろうや雪止み月も入りし後 同、美しう作り立てしも霜の菊(白骨鯁)同。桃さくや生垣はさむ組やしき 元貫(十五日) 田中へ赴く。雨降れど翌日に伸さで花見哉 氷。(十六日) 小野氏の高楼を、絵にあらで花の雲間の棟瓦 氷。(十八日) 春雨や糞作り居るわたし守 黒州 高岡、川向ひ星は見えつゝ小夜時雨 同、骨折し菊の枯葉の寒哉 同。(廿二日) 老師古希の賀に行末を折って「頼みある杖も八千世の椿哉」 氷、七十賀、題梅 春ごとに杖も頼まで梅見哉 氷、(廿四日) うかひ山会 題茶摘 世を宇治と見捨はされぬ茶摘哉 氷、天明三年癸卯の歳暮に門瑟古希賀集『生の松』が刊行され、小原の石牙を筆頭に、敲氷・開朝・五原・烏橋・陽葩・閑木・十花・斗十・花郎・古橋・孤筵・鴉路・潤路らの吟が掲げられている。

(卯月朔日) 常々の不性にも似ず更衣 氷(三日) 浄光寺の浮木に返し「杜宇まだ卯花もくらき庵 氷、(六日) 書音、鶯や天が下みな春に成 秋瓜、狐火の方は野末かおぼる月 乱竿、梅が香や夜舟へしれる難波瀉 椿年(八日) 奇峰寺の会、灌仏や妻持寺は物淋し 氷(九日) かんこ鳥茅花に道を埋みけり 氷(廿三日) 養老園にて、春の夢覚て味はふ新茶哉 氷、待得て簾捲くほととぎす 潤路(廿四日) うかひ山会兼題、翌日しらぬ老の手作や芥子の花 氷(廿八日) 丹後宮津の跨山から文台の材として橋立の松板を贈られて、「ふみかよふ橋立涼しふみつくゑ 氷」。

(五月朔日) 西山吟行し十日に帰庵。(端午) 今一度借りたき宿の蚊遣哉(探題) 氷(十日) 書音、移転してはじめて聞やか
 んこ鳥 孤石。(廿一日) 地藏菩薩奉納国分連勧進 世を救ふ柱杖に伸びる藜哉 氷(廿四日) うかい山会、行先も跡も螢
 のさかり哉 氷(晦日) 守黒念懐旧の五十韻興行、発句「いにしへの調子も斯くや鳴水鶏 氷」
 (六月朔日) 書音、卯の花をかいしきにして初茄子 仙鳥、旅の気の慥に成りし清水哉 (二日) 青雲の志有て武江に赴く
 人に、頓て着る錦たのもし若楓 氷(五日) 書音、寝忘れた歌へ朝日やつゝじ売 秀外、(十二日) 一日路誰にも逢はずか
 んこ鳥 霜飛(十八日) 二里来てもまだ屋顔の盛哉 氷(廿二日) 文通、泊り人の膳にならべる蚊遣かな 米珠(廿三日) 文
 通、夕顔や煙に曇るいもが軒 伯先、眺めやれば我住かたぞ雲のみね 同。(廿四日) うかい山会、見る人の群れつつは来ず蓮
 の花 氷(廿五日) 語り合ふ風雅の道や風薫る 柳女、松葉あつめて庵の蚊遣火 氷(廿九日) 最う央年もめぐりて茅輪哉 氷。
 (七月朔日) 摺鉢の音高々とけさの秋 氷(二日) 稲妻やうしみつ時も憚らず 氷(三日) 十年ぶりで丹後から喬樹の訪れ、
 夢かとのみ、いつの間にか律のしらべや庵の松 氷(八日) 六日夕から山鳴動す、浅間の甚だしく焼ける故とぞ。
 (九日) 立秋、年寄の耳うとからず萩の音 氷(十四日) 魂棚や棧敷に似れど物淋し 氷(十五日) 庵に会して各探題 庫
 裡婆々のはじめて笑ふ躍哉 氷(十六日) 文渦の令愛を失つたのを聞いて益に申贈る。世の中は実まばろしの影躍 氷(廿
 一日) 白旗社奉納、豊なる神や源氏の守神 氷。(廿八日) 梅花齋に会して探題、稲妻や此のかわいは畑ばかり 氷。
 (八月朔日) 八朔や鎌打鍛冶の朝清め 氷(五日) 赤穂義士の墨跡をひろめ短冊を求められて、いくよへてもかつらをの
 名は隠もなし 氷。(七日) 小松無量山に会して探題、鉢の木に通ひ馴たり鶺鴒一羽 氷。(十五日) 中秋月、戸を叩く音が
 くしけふの月 氷(十六日) いざよひの闇や砧の間はじめ 氷。客有りて探題雨中の砧、隣さへ遠砧なり夜の雨 氷。諏訪
 の自徳が芭蕉の愛した鶯の水入を譲り受け家珍とし、発句を勧進したので申贈った句、鶯や今朝とくとくと硯水 氷。
 また大八田の興石氏の母の七十賀の祝いを端午の題で、その祖父三十三回忌を薄の題で申贈った。年よらぬ顔やさつき

の鏡建 氷、植置し人を招くか花すつき 氷。(十九日) 木曾川の音に寝かねて夜寒かな 氷。北へさす枝から早し梅もどき 氷。
 (廿三日) 四竹楼で探題 下折れも刈捨られぬ薄哉 氷(廿五日) うかひ山会 淋しさやあしたの原に鹿の跡 氷。(廿八
 日) 西郡吉田の人々から諏訪奉納の句を望まれて、まだ花の中から蕎麦の初穂哉 氷。
 (九月朔日) ばせを葉の下に円座やけふの月 氷。(五日) 向岡舎にて探題 うら枯や牧士の外に人を見ず 氷(十三日) 翌
 からはしぐるもよし後の月 氷(十八日) 青柳へまかりける道のほどにて 牛の子の踏分歩行紅葉哉 氷。(廿四日) 文通、
 誰家ぞ秋経る夜半に琴の音。(廿九日) 亭午の孫氏神詣でに、竹の画を戯れ書きし、一句を贈る。其子ふえ其孫殖て竹の春
 氷(晦日) 貯はれぬ茄子に秋の名残哉 氷。
 (十月朔日) 放されて鶉のぬれ歩行しぐれ哉 氷(四日) 琴声園主まかりけるを聞きて、糸切れし琴に松風しぐれけり
 氷(五日) 達磨忌や紅葉元これ赤からず 氷(十一日) 月影塚の芭蕉忌に時雨吟手向ける、芳野見た笠したはるゝ時雨哉
 氷(十二日) 芭蕉忌、不易といひ流行といひ其さまはかはり侍れどことのはの尽さるいと尊し、塚に散る紅葉や浜の真
 砂ほど 氷。『天明三年卯年武江ばせを忌手向吟(草稿)』には、門弟十七人の句が記されている。(十三日) 来客、軒
 下に毯積む庵や初時雨 濶路(十四日) 伴茂真ぬしを悼んで、霜の後残る名高しきくの花 氷、柏尾山の冬松を悼んで、し
 ぐるゝや人の身上も定めなし 氷。(十八日) 探題鷹・湯婆を得て、肘張って丸雪恐れぬ鷹野哉 氷、河豚を喰ふ菌もなく成り
 たんばかな 氷。(廿四日) 平橋庵の紅葉盛んなれば、あかねさす日を照返す紅葉哉 百屋敷 和秀、新酒くまなく向ふ盆 氷。
 (十一月朔日) 筏士の跡へ押出す落葉哉 氷。(十日) 留主^寺へ来て棚搜しより巨燧哉 氷、西郡中野諏訪社奉納勸進に、氏
 子へはゆるしの箸や葉喰 氷。(廿三日) 鐘馗画賛 花のさく世になさんとておにやらひ 氷。四竹楼で当座、里神楽人しろ
 くと焚埃り 氷。(廿四日) うかひ山会兼題、餅搗や寺も浮世の外ならず 氷。(廿五日) 聞漁君を賀して、水仙をかざし
 の花やうひかむり 氷(廿八日) うかひ山において、来歳巨発句会興行。

(十二月朔日) 是ほどは何所から湧ぞ川ちどり 氷。(七日) 小松定会兼題、節季候やつま子の前も恥め顔 氷。(十三日) 為霜ぬしに送別、ゆく年や星を戴く旅の空 氷(十七日) 須磨画贊 こりずまに住て名高し浦ちどり 氷(十九日) 飛霜斎にやどりて 寒からぬ宿かりてはや春の夢 氷(廿二日) 秋江めが隠居を訪ふて、機の音さへかしましと冬籠 氷(廿八日) 薙髮吟、年忘といふめることは、空の名残をしむにたへず、はた鏡の影の霜に驚くものから寄つどひてまさな事をもする成べし。予もおどろくしき髪に梳るもむつかしければ、ひそかにはかりて初午の日ならねど剃したあま哉と打ずんじつゝ親しき人々に告侍る。坊主子のむかし語りや年忘 氷

【坐右稿】と「草稿」に見える天明三年の敲氷発句数一三五。

【生の松】(門瑟古希の賀集)と「をりづる」(敲氷編。母の八十の賀集)が春刊行された。

【癸卯年月次発句合朱点、催主花青】と記された十六丁の草稿と別に「句合詠章」「天明三癸卯年、催主花青」と記された草稿がある。後者は天明三年八月と九月の句合で、その発句と作者を記したもので、平橋庵を中心に句合が流行していたことがわかる。

【筆の道】孤山編(志村和友二五周忌追善集)に発句一入集。

天明四年(一七八四) 五十三歳

この年は「坐右稿」がない。恐らく粉失してしまつたのであろう。管見に入った「天明四年辰年」の「別会草稿平橋庵」には、月次十二日定会を除いた別会(平橋庵での)記録がある。

(一月十一日) 平橋庵で歌仙興行。「詩大工の見立歩行やむめの花 敲氷」を発句とした花青・椿年・杜栄・春夕の五吟である。探題は春雨で、「春雨や辛う成たる鱒の塩 氷」

(閏正月十日) 杜栄・平橋・花青の歌仙興行。(同十三日) 綾梭・平橋・花青の歌仙興行。(同十九日) 青羊・平橋・

春夕・花青の四吟歌仙興行。

(二月三日) 杜栄・平橋・春夕・椿年・花青の五吟半歌仙興行。

(三月二日) 百朶・元斎・椿年・平橋・花青・春夕の歌仙興行。

(三月十日) 敲氷は俳諧行脚の旅に出発した。この行脚は『西行日記』と命名されている。三月十日に出発し、八月十五日夜で終わるといふ長旅であった。冒頭は「奥の細道」に学んでしかも敲氷らしい文章である。

天地は逆旅にして日月は過客なりと。はたしろかく小田の行戻りも観ずればすべて旅ならぬはなし。足曳の遠山さくら咲ける日より林の鳥の声も人をいさなふに似たれば、兼て思ひ立つまゝに杖笠碗携て出でぬ。草の戸はとぎすべきわづらひもあらねど、うしろがみ引かるゝものは老ぬる母なんおはせばなり。むかし鬼貫といひけん人「秋風寒し親ふたり」と口ずさみし、さこそはとおもひ合せらる。こたび椿年はやつがれが長途うしろめたしと同じやうに旅装ものしたれば、庚午の記行に效ひておこがましくも笠の端に把筆しつる。うなづき合ふほどにはや旅の心にはなりたり。

右の文章中にある「庚午の記行」は「奥の細道」のことであろうが、庚午は元禄三年である。正しくは己巳とあるべきを敲氷が誤っているのである。また、「秋風寒し親ふたり」と鬼貫の句を引用したのは、「まこと」の俳諧を説く鬼貫だけに、八十一歳の老母を家に残して、「行脚に出発する敲氷のわりなき感情を端的に読者に訴える効果が強い。以下行脚中の敲氷の俳諧生活の実態と作品を摘記する。

(四月十日) 首途に当たり笠に句を書付ける。花降りて我をもてなせあじろ笠

平橋

敲氷、道々の花折入れん葛籠骨柳

椿年 夜、相川亭で表八句興行。(十二日) 乙黒の孤景園で百韻興行。(十四日) 缺沢の春耕亭に宿ると、小笠原の右書が追って来て発句合三巻の評を乞う。(十五日) 身延では泰温上人の律院に宿り、郢曲を聞く。(十六日) 身延参詣。鶯谷で「我々の身にも御法の花吹雪 氷」南部の鯉文亭に宿り、家刀自の出産を祝して「産声の囀り聞きぬ花の宿

氷」。(十七日) 岩淵の亀友亭で、「爰なりと門叩きけり花の雪 氷」。(十八日) 乙雅・春里らと八吟歌仙。(十九日) 磯の波打際に臨み、蟹の子が鮑をとるを見て「蟹が身はいつも春なり波の花 氷」。(廿二日) 草薙の社を遙拝して「草焼し跡に氏子の家居かな 氷」蟹の子からみ、みんだれという花を教えられて、清少納言の「耳無草こそあはれなれ」と詠じたことを思い浮かべ「名を聞けば耳だれ草も芳しき 氷」と吟じた。駿府の官舎の勤めの玉瓜に別荘に案内されて、「深山木を植て霞のくみ所 氷」。(廿四日) 柴屋軒に宗長の跡を尋ねる。先師眠柳居士の「木ばさみ見はや」と吟じたのも五十年の昔と思ひながら立ち去り難く、閑古鳥の声をきく。「春もはや名残の哀の一句づつ 氷」(廿五・六・七日) 一日栃山の禅林に遊び「花散つて青葉の中に白岩寺 氷」と吟じ、またこの地の宗長庵に知人の住んでいると聞いて訪れる。光陰の過ぎ去ることの速やかなるを感じては「行春や人は若葉になりもせず 氷」(廿八日) 小夜の中山で「山路来て命なりけり藤つゝじ 氷」と吟じ、霞の横折りたなび隙から甲斐がねの雪の高根を飽かず眺める。友人八秋亭の主の故園を訪れて淹留する。

(四月朔日) 中和泉百童亭で三年ぶりで夜話。(二日) 池田の宿の熊野の古墳、行興寺の母子の碑、かの長の跡を訪ねる。(三日・四日) 吉田の酒屋楚野に宿り、翌日忘郷庵で歌仙興行。(五日) 赤坂の駅のほとりにある三河守定基朝臣(寂照、円通大師)の旧跡を訪れる。藤木八幡宮の神宮竹尾氏の許に宿る。翌日歌仙興行。(七日) 八橋村の無量寺に参詣し在中将の影・橋杭の朽ちたのを見る。「乱れ葉は水の蜘蛛や杜若 氷」鳴海に宿る。(八日) 知足亭の祖翁の笈を見て「松島の散まつ葉あり笈の底 氷」と吟じ、星崎の千鳥の軸や歌仙の懐紙に接しては「笈も文も昔の風の薫りかな 椿年」と詠じた。(九日・十日) 大隠也有の旧館を訪れると文樵主らが守って居て、風雅の道正しく奉教の志に感激する。「麦秋も秋にははらず松の月 氷」(十二日) 水鶏なく佐屋のわたりは祖翁の昔が偲ばれ、「人のいふにたがはず聞きぬ水鶏塚 氷」と吟じ、桑名の浜の地藏堂を眺めて、祖翁の白魚の詠を懐かしんだ。(十三日) 道の枝折し

て貰った松村某に「行先は若葉隠れに鳥の声 氷」を書き贈った。(十四日) 白子観音寺の不断桜を見、「咲ば散りちれば跡からさくら哉 氷」と吟じ、翌日阿漕が浦を過ぎて松枝の翠涛亭に宿った。(十六日) 齋宮村には皇女の住み給ひし俤を偲び、十七日内外の神宮に参拝した。豊宮崎の文庫の林学士の額、西行谷の神照寺の西行上人作の鉦作り像を拝し、十八日には蒔絵松、朝熊嶽の金剛證寺を経て十九日に鳥羽の湊に出た。(廿日) 前日尋ねることのできなかった麦林の碑を岡本の金剛山如法寺に尋ねる。「かんこ鳥の一句を彫て元文五年庚申某の月とかねて知る銘なりし。さびしいと知らぬ人なしかんこ鳥 氷」と記している。更に麦林の旧庵の跡を探し、尾部の常明寺に兼好法師の楽書を見、守武社では「蚊遣焼て一夜百句を手向ばや 氷」と吟じた。(廿一日・廿二日) 丹生の里の麦鶏舎に宿り、高見峠を越え木津の山家に寝て、廿四日龍門の滝で「雲起る瀧見て寒し夏衣 氷」と吟じた。(廿五日) 吉野山では「国栖の子が表わら笛を聞せけり 氷」、苔清水を見ては、「今もとくくと落ちて耳を澄す。祖翁も誠に浮世そゝがばやと吟じ玉ひき。鶯も老を養へ苔清水 氷」記している。廿七日には高野山の御廟や山内ここかしこに納礼し、廿八日十津川に出て、新宮に向かう。

(五月朔日) 三熊野神社に参詣して「風薫る殿作りなり熊野杉 氷」と吟じ、那智観音大士に札を納める。椿年は宿題を果たした機会に南浦と改号する。二日は太地の浦で突留めた末鯨鯨を見、五日は有田の浦のあやしい家に宿った。六・七・八の三日雨のため宗祇庵に留まる。みなへの浜・千里の浜・岩代の松など歌枕を過ぎて十日道成寺では「おもしろや夏経の鉦も乱拍子 氷」と吟じ、十一日藤代の御坂の行尊僧正の歌、日方の尾田庵の江口君のかた画に興じた。(十二日) 紀三井寺に詣で和歌の浦に赴く。玉津島神社では「みかがみの影透通るしげみかな 氷」の吟。根来寺の磯石・粉川寺・金剛寺・叡福寺・竜田・増賀聖の廟・長谷寺・三輪山・玄寶僧都の旧跡・三笠山・笠置山など行脚して、伊賀上野に至ったのは廿三日であった。養虫庵の主桐羽を訪うと三年先に物故したとの由。後の家戸自のは

からいで什物の墨跡あまたを見ることができて哀れさは一入であった。湖南の信業に六月六日まで滞在し、義仲寺、祖翁の廟に拝礼した。十日には、石山の幻住庵に到り、幻住庵記の景色を眼前にして、傾く日影に我が影を伴ひつゝ、徘徊して吟じた。「こととはん椎の木も皆若葉哉 氷」。三井の晚鐘も聞きたいと思ひながら唐崎の松に急いだ。(十二日) 洛東双林寺の祖翁の塚に詣でる。仮名の碑の墨直しの法会も今に怠りなく、西行上人・頓阿法師の塚と並び立っている。「暑き日や石碑の笠も旅姿 氷」。(十六日) 東山文山翁の詩仙堂を尋ねると、今は尼法師が住んでいて、かの六物を守っている。「加茂川を越さでもかもの風涼し 氷」。(廿一日) 落柿舎の跡を絶さじと或人が結庵したが、今はいづこに行つたか知らないといふ人がある。見れば柿の樹も誰が植継いだか二三株目だったので、「柿の実の来て見て置くや夏木立 敲氷」。(廿二日) 愛宕山を越え丹後の亀山に赴いたが蒸気に当たつて心地例ならず、廿三日堀川の宿に帰る。日を経るまゝに悩んで三旬過ぎるを知らなかつた。「西行日記」は中秋月下の記事と発句で終わっている。帰郷の記録はないが、敲氷は「かつしか日記」(草稿)によると再び十月十日に江戸に向けて俳諧行脚の旅に出た。その旅は名所旧蹟を探つて吟ずるといふよりは、俳諧指導が中心であつた。例えば十一月廿六日の無味庵での歌仙興行には、「身を捨てこそ暖まれ河豚汁 氷」「炉に次ぐ炭にかへる一陽 竹外」などと吟じると共に、老師門瑟の草堂で、硯の水を汲み機の塵を払つては、やゝ病弱勝ちなのを助け起臥を共にしていた。また、故郷の老母の身の上も心に懸つて十二月四日には、「立ち出るあとさき深し雪の道 氷」と留別の句を詠ずると、門瑟も「竹の子を掘る出立なり雪の糞 抱山」と吟じて見送つた。帰途は三省堂・収井亭・一竹亭・五書亭・梅声観などで俳諧指導を重ねて、廿一日に帰庵した。

天明四年「西行日記」その他に見える発句九十五。

「ちちのみ集」(荒井井眉追善集)に発句一入集。

(未完)